



かつて偽装問題がマスコミを騒がせていたことがあったが、最近になって再び話題に持ち上がってきている。薄利多売のカラクリが偽装であったり、ブランドの知名度の上に胡坐をかいて消費者を馬鹿にしたような偽装であったりでさまざまではあるが、当事者の苦しい言い訳を聞くのはつらいものだ。

信用の上に成り立っている人間社会ではあるが、所詮は「人間のはからい事」。自分の都合によって時として裏切りとなってしまうこともあるものだ。どこまでも「信用」を貫き通せば、自滅の道も考えなければならないという悲しい現実社会も見え隠れしてくる。うごめく煩惱との葛藤は人間だれしも経験することではあるのだが、人間が人間として存在しうるのは、この一点が心の箍たがになっているかどうかなのだから、それほど安易に許されるべきことでもないのだ。

「何を信用してよいのか分からなくなった」そんな声が聞こえてはくるのだが、あなた自身の盲信ぶりも、偽装への一役を担っていたのではないですかと、言っては言い過ぎだろうか？

「我がふるさと墨俣」

N 町 U・H

墨俣に生まれ、育てられて五十六年が経ちました。子供の頃には墨俣の魅力をほとんど感じることはできませんでしたが、五十代を過ぎてからは本当に良い町だと思えるようになりました。

確かにかつて栄えていた華やかな墨俣とは様相もすっかり異なり、少子高齢化によって、人口も減少気味。それに伴う空き家も目立つようになり、廃業される商店までもが増えてきました。この先五年後、十年後の墨俣の状況を考えた時、いったいこの町はどうなってしまうのだろうか、一抹の不安を感じるのも事実なのです。

しかし、改めてこの墨俣を歴史や文化という観点から見つめ直してみると、意外にも魅力にあふれた町であることに気づかされてくるのです。この町に住む人たちの思いやりのある親密な人間関係や、前向きに物事に取り組もうとする協力が旺盛であることは、新たな町づくりへの大いなるエネルギーとして期待がもてるのです。

一夜城に、美濃路墨俣宿、鎌倉街道、寺町界隈、そして犀川堤の桜。また新たにアジサイ街道や、犀川さくら公園等々が加わり、さらにはそれに関連したさまざまに工夫が凝らされたイベントが、活性化への足掛かりとなって町の雰囲気を感じて立っています。活気ある墨俣の未来像が、自分たちの町は、自分たちの知恵と努力でというひたむきな町民の思いによって見えてくるように思えるのです。今、行政指導ではない住民主導の町づくりに大いに期待しているところです。

これからは多くの先人によって築き上げられてきた「我がふるさと墨俣」の歴史と文化を継承しつつも、もっともっと元気で魅力ある墨俣にしていけるよう、多くの仲間たちとともに努力していきたいと思っています。

報恩講

十一月八日(日)

午前・午後



平成二十五年報恩講が勤まります。本年春には御遠忌も勤まり、格別な年度でもありました。ぜひ多くの方にご参詣をいただき、改めてその実感を確かめていただきたいと思います。当日には門信徒総会も予定をいたしておりますので、重ねてご参詣いただきますことをお願い申し上げます。

お磨きは十一月二十八日(木)に変更となりました。

午前九時〜十二時 お昼準備いたしております。

多くの方にご参加いただけることを、願っております。

柿熟すがごとく、深み増したし、わが人生。
そんな人生を歩みたいものだと願いつつも、ついつい惰性に流されていく私。どこか悲しい思いを残しての今日の終わり。明日も明後日も、来年もと、どこまで流されていくものやら。
せめてここらで確かなものを感じて生きていものだと、熟柿ひとつに南無阿弥陀仏。

親、いのち実り
と、たゆむなり
けり。



岡田一男様邸



坂 旭様邸

不幸続きの人生の中で、確かめられたこと。

ある日の対談より

思わぬ方から思わぬお話を伺うことができました。
思わぬ方とは大変失礼な言い方かもしれませんが、今までのさまざまな関わりの中では、仏法とは縁の遠い方だろうと思っていたからだ。
ある日ご法事の席において、しみじみとおっしゃった方にはその方の生い立ちを通してのある宗教との関わり方だった。その方の実家はその頃、不幸続きだったと言ったか、家族に次々とよくないことが起こって、その不安の解消と改善のためにある宗教に入信したというところ。
まだ幼い子供であったその方も、母親に連れられて熱心にお参りをされたようだった。特別信心があったかと言ってもそうでもないかのようなのだが、これも親孝行だと思って、言われるままに小学校、中学校、高校に至るまでそれぞれの会、合宿や研修をされていたようだった。しかし事態は一向に改善もされず、相変わらず家族の病気や、父親の悪い酒癖は続いていたようだった。
父親自身も朝に夕に二三日のお参りをするくらい熱心？な信者らしかったようだが、ちべはべな言動から不信感が芽生えてきたようだ。
「宗教で病気が治るはずがない」と、思い切って家族の了解のもと脱退したのだそうだ。
思わぬ方からの思わぬ体験談に、仏法への深いご縁が生まれたようで、日のご門徒との関わりについて、深く反省させられたことだ。

十一月の学習会は
第二土曜日(九日)です。

『お文』に学ぶ

第四帖十三通の予定です。